



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## フッサール哲学 早分り

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Husserl, phenomenology, intentionality, noesis, noema 作成者: 二宮, 公太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/95">http://hdl.handle.net/10258/95</a>

# フッサール哲学 早分り

二宮 公太郎\*1

## A Guide to Husserl's Philosophy

Kohtaroh NINOMIYA

(論文受理日 平成14年 8月30日)

### Abstract

This treatise is intended as a guide for learning easily Husserl's phenomenology. Firstly we will see the structure of 'intentionality' in the case of perception and will learn meanings of terms 'Noesis' 'Noema' 'hyle'. Next we will see theories called totally 'genetic phenomenology'. And then we will inquire closely <Noesis - Noema>analysis in the "Ideen I". Husserl analyses three dimensions of intentionality distinguishing several characters of act. This analysis is considered also in relation to truth and evidence. Lastly we see the method of 'reduction'.

Keywords : Husserl, phenomenology, intentionality, Noesis, Noema

### 1. はじめに

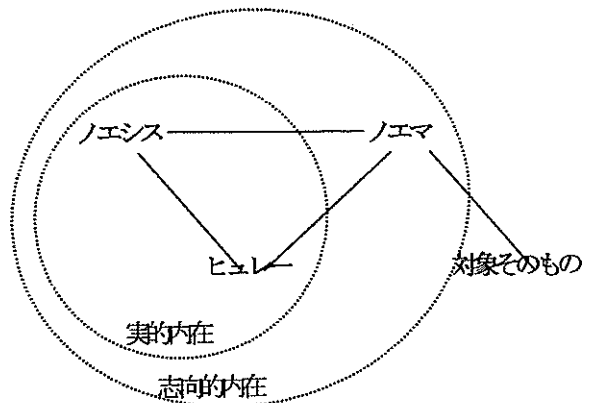
普段はフッサール最初期の極めて難解な数理哲学と格闘している私だが、フッサール哲学の中核を成す部分をできるだけ分かり易く記述してみたいというのは、私の以前からの念願であった。今回、この場を借りることにしたい。

フッサールの文章は、術語や言い回し等の点で極めて難解なのだが、そこに語られている内容は極めて当然のことで、誤解を恐れず言えば、むしろ単純である。それは、誰にでも分かるものである。フッサールの言葉を普通の言葉に翻訳すること、それはフッサールを研究する者の義務であるように、私は感じたりもする。そしてまた、その過程の内に私自身の思想も必ず現われるものだと信じたい。

\*1 共通講座・哲学

### 2. 知覚の<ノエシス - ノエマ>構造

<知覚>とは、物に関する実際の認識のことである。日常の経験で最も基本的な場面における認識である。フッサールも、これを最も根源的な認識形態と見ており、さらには「真理」を究極的に基礎付けるものとしての地位をこれに与えている。フッサールの「志向性」理論が分析する<ノエシス-



ノエマ>構造は、フッサール哲学の基本骨格ともいうべきものだが、これを我々は、まず<知覚>という場面の内で見ていくことにしよう。図を見ながら考えてほしい。

我々が室蘭工大の正門を入ったところには何本かの木が——「木」だと分かること自体が実はここでの問題なのだが——植えられている。そのうちの或る一本を知覚している場合を例にとってみよう。

視覚には、立派に枝を張った——「枝」という言葉も本当はまだ使わないほうがよいのだが——この物体の<形>が見えている。この感覚に与えられている内容が、「ヒュレー」*hyle* (素材・質料)とフッサールが呼ぶものである。しかしそれだけでは認識ならず、このヒュレーは、意識に積極的に取り上げられなければならない。

この役割を果たすのが、「ノエシス」*Noesis* (広義で「観ること」と呼ばれる意識の能動的な作用である。意識は、このヒュレーを「生気づけ」*beseelen*で——言わば命を吹き込んで——、それを対象として構成すると同時に、それが「木である」という「意味」を、この対象に与える。このように感覚与件から対象を構成しそれが「何であるか」を規定する意識の作用、それがここで言う「ノエシス」である。

他方、このようにして形成されてくる<対象>や「木」という「意味」*Sinn* が、ここで「ノエマ」*Noema* (広義で「観られたもの」と呼ばれるものである。「ノエマ」は、意識がそれを志向する——意識がそれに向う——相手として、「ノエシス」作用と相関的に、同時にその対極に形成されるのである。

このノエマとしての<対象>ないし<意味>は、「対象そのもの」——いまの例では当該の<木そのもの>——への「方向」*Sinn* を示してはいるが、しかし対象そのものではない。「対象そのもの」(「対象それ自体」とは、意識の意味構成作用を度外視された限りでの対象のことである。フッサール自身が挙げている例を借りれば、<木そのもの>は火を付ければ燃えるが、「木」という<意味>は、火を付けることもできないし燃えることもないのである。

さて、フッサールは、「ヒュレー」と「ノエシス」は意識に「実的に内在する」が、「ノエマ」は意識に実的には属さず「志向的に内在する」、と言う。

確かに、感覚与件は、当の意識の流れのなかで、そのつど言わばナマで与えられるものであるし、また、それについて対象として把握して「意味」を付与する作用は、当の意識が、意識の流れのなかで、そのつど言わば一回限り遂行するものである。意識に「実的」*reel*に属するとは、このように、そのつどの意識に実際に含まれ、意識の流れの中に実際に座を占める、ということを行っているのである。

問題なのは、「ノエマ」の存在性格である。

ノエマは意識に「実的」には属さない、と言われる。これに関しては注意が必要である。後にフッサールは、「ノエマを体験から切り離し実的契機という性格をノエマに否定する根拠は存在しない」(Hua, Bd XI, S. 335)として、ノエマにも「実的」な存在性を認める記述をしているようである。ノエマも、或る者が或る意味付与を現に為している際には、当の意識の時間流の内にはしっかりと位置を占める以上、それが当の意識に「実的」に属するということは、実際のところ否定することはできない。「ノエマは意識に実的に属さない」という『イデー』におけるフッサールの言明は、「ノエマは、単に意識に実的に属するに留まるものではない」という意味に取るべきであろう。

「意識に志向的に内在する」とは、<意識が為す志向の内存在する>ということであり、別の言い方をすれば、ノエシスに相関する他方の契機として意識に対して存在するということである。

ノエマのこの存在性は、そのつどの個々の意識の流れに付着する「実的」という性格を超えるものを有つ。ノエマは、その都度の意識からは独立して、同一の存在を保つことになるのである。私によって形成される「木」という<意味>は、それを形成した私の作用への依存を脱して存在する。私はいつでもそれを志向し得るし、そのみならず、誰でもがそれを志向し得るのである。

ノエマのこの「非・実的」な性格が、もっと言えば、いつでも誰にとっても妥当する汎通的な存在性が、<表現>——意味構成作用に「基づけ」られた意味表現作用——が成立するための基礎となり、従ってまた、表現の意味——指意 *Bedeutung*——のイデア的統一性の根拠となる。私が他の人に「あの木は美しい」と言った場合、その人も「あの木」ということの意味を理解する。ノエマの汎通的な存在性が、初めてコミュニケーションを可能にしているのである。

意識に「実的」に属するノエシスの作用が、なぜ、

「アイデア」的存在性を有するノエマを形成することができるのであろうか。それは、実は、フッサールが把握する「意識」そのものの存在性格に根差している。後に「還元」ということを見る際に触れる。

### 3. 「発生的現象学」

「発生的現象学」と呼び習わされている諸理論を見ていこう。

意識が、「……である」とか「……が存在する」とかとして、能動的にノエシスを働かせノエマを構成する以前に、対象が与えられるときに既に、意識の内では潜在的に働き出すものが在る。これによって、能動的な作用にとっては、対象が、「既に与えられている」という仕方、受動的に現われてくる。このときに意識が密かに遂行しているものを明らかにして、そのような根源的な意味での認識が発生してくる過程を明らかにしようとする。それが発生的現象学と呼ばれるものである。

#### 「射影」・「地平」

我々が何かの物を知覚するとき、必ずこのような仕方、対象が与えられるという基盤が在る。

対象は、その時々で、必ず或る一定の側面をしか我々に見せない。このことをフッサールは、「対象は射影する *abschatten*」と表現する。対象は一定の映像を切り取って我々に見せる、という意味である。我々にとって見える側面が「射影」*Abschattung* である。

また、或る特定の対象は、必ず背景と共に与えられる。対象と背景とを合わせたパースペクティブの全体を、フッサールは「地平」*Horizont* と呼ぶ。そして、その中で、注目されている対象を「内的地平」と呼び、注目はされないとしても与えられている背景を「外的地平」と呼ぶ。

我々が物を知覚するとき、それが<何であるか>を定める以前に、気付かぬままに二つのことを同時に行なっている。我々はまず、対象を背景から区別して、それを浮き上がらせる。しかし、対象は、我々に対して射影している側面と射影せずに我々には隠れている側面とを有つ。この隠れている側面が在るのだということ自体、我々の意識の潜在的な働きの産物である。我々は、この見えない部分を補いながら、見えている部分と合わせて、意識の内では統一することによって、一つ立体として、一つの対象を知覚するのである。

キーワードをまとめておこう。

「射影」	対象が見せる一定の側面						
「地平」	パースペクティブの全体						
{ <table border="0"> <tr> <td>内的地平 (対象)</td> <td>{</td> <td>射影しているもの</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>射影していないもの</td> </tr> </table>	内的地平 (対象)	{	射影しているもの			射影していないもの	
	内的地平 (対象)	{	射影しているもの				
		射影していないもの					
外的地平 (対象の背景)							

#### 時間意識

フッサール自身が挙げている例で始めよう。我々が或るメロディーを聴いているとき、いま聞いている音を、直前の音や直後の音と、つねに関係させながら聞いている。音程が「上がる」とか「下がる」とかということは、これによって初めて可能となる。そして、フッサールによれば、これが我々の源初的な時間意識である。

「現在」は、意識にとって、各々が点のように孤立した一瞬一瞬ではなくて、少し前の「たったいま」と少し後に来るであろう「すぐのいま」とを共に抱え込んだ、一定のはばを有ったものである。それらが、核としての「いま」の周りに引き寄せられている。それが「生きた現在」*Lebendige Gegenwart* である。そしてフッサールは、「たったいま」を意識に留めておく働きを「過去把持」*Retention* と呼び、「すぐのいま」をそうするのを「未来把持」*Protention* と呼ぶ。

ここまでの範囲が、「現在」ということの時間意識である。さらにフッサールは、我々が普通「過去」と呼ぶものの意識を「過去志向」と呼び、我々が普通「未来」と呼ぶものの意識を「未来志向」と呼ぶ。

「現在」の意識に含まれる「過去把持」も、それが遠く過ぎ去るものを顧みるにつれて「過去志向」へと落ちて行き、「現在」の意識に含まれる「未来把持」も、それが遙か先を臨み見るにつれて「未来志向」へと翔んで行くのである。

キーワードをまとめておこう。

「生きた現在」							
{ <table border="0"> <tr> <td>核としての「いま」</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「たったいま」</td> <td>——「過去把持」(⇒過去志向)</td> </tr> <tr> <td>「すぐのいま」</td> <td>——「未来把持」(⇒未来志向)</td> </tr> </table>	核としての「いま」		「たったいま」	——「過去把持」(⇒過去志向)	「すぐのいま」	——「未来把持」(⇒未来志向)	
	核としての「いま」						
	「たったいま」	——「過去把持」(⇒過去志向)					
「すぐのいま」	——「未来把持」(⇒未来志向)						

#### 身体性・「キネステーゼ」

身体は、知覚における空間的契機の原点となる。

「ここ」と「そこ」という空間の基本的規定は、身体が基点となる。また「前後」「左右」「上下」という方向性の規定は身体の姿勢が決定する。現象

学的なこの空間規定こそが根源的なものであり、統一的・客観的な意味での三次元空間はこの根源的な空間経験から形成・構成されたものである、とフッサールは考える。

この「原点」は自発的に動く原点である。そして、動きながら知覚するとき、そこに働くのがキネステーゼ *Kinästhesie* (運動感覚) である。これは、キネーシス (運動) とアイステーシス (感覚) とから成る合成語だが、それは、単に自分が運動しているという感覚のことでなく、運動しながらする感覚のことである。自分の位置や向きを変えながら物を見るとき、地平や射影が変化する。意識は、変化するこの視野や対象の方に向っている。そのときに、わざわざ注意を向けなくても自分の動き方が潜在的に分かっており、それを地平・射影の変化と総合する能力が意識には在る。それがキネステーゼの働きである。

<動きながら見る>という、我々がいつも経験しているこの場面を認識論の内へ取り込んだこと、そして、<身体>ということに対して、単なる認識の対象としての地位ではなくて、認識の主体としての役割を新たに与えたこと、これらは、近世哲学が欠

き、フッサールが現代哲学に持ち込んだ重要な契機である。

キーワードをまとめておこう。

原点としての身体——「ここ」と「そこ」、方向  
 自発的に動く原点  
 運動感覚  
 主体としての身体

#### 知覚の発生

以上三つの項目での受動的発生の分析を、総合して考えてみよう。我々は、物を知覚する際に、対象をぐるりと廻り込んで見るということをよくする。そのとき、「キネステーゼ」が働き出す。「地平」や「射影」が変化し始めるが、この変化を、我々は自分の身体の運動に関わらせて受け取る。さっきは対象のあの側面のあの模様が見えていたことを私は「過去把持」していて、いま見えている模様と比べることができる。そして、さらにこっちの方向にこう回り込めば模様はこうなるだろうと「未来把持」したりする。こうして、知らず知らずのうちに、一つの対象が意識に与えられているのである。

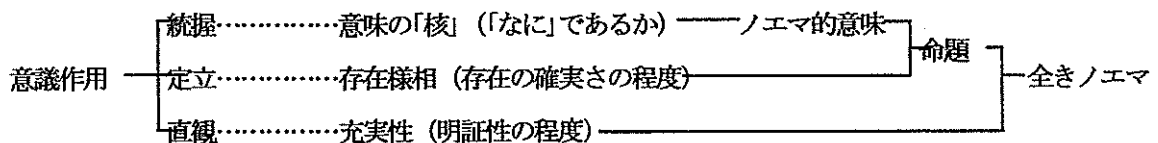
#### 4. <ノエシス—ノエマ>分析

さて、いよいよ我々は、フッサール哲学の中核を成すところへ入り、フッサールが<ノエシス—ノエマ>構造の詳細な分析を示した『イデー』第一巻第三篇の内容を見ることにしよう。ここでは、志向性の成素である「ノエシス」や「ノエマ」も広い意味で用いられ、また意識作用の性格も知覚だけでなく全てのものが考えられている。

#### 志向性の基本成素

先に知覚の<ノエシス—ノエマ>構造を見た際に、ノエシスについて、「意味を形成・付与する」作用と

して説明し、その形成された「意味」がノエマであると説明した。しかし、そこでの<ノエシス—ノエマ>は、志向性の或る一つの面を示したものに過ぎない。フッサールは、意識の志向性が、三通りの基本的な要素から成る、とする。これをノエシスの方からみれば、「統握」・「定立」・「直観」である。ノエシスの各要素に対して、ノエマの各要素が対応する。順に見ていこう。整理しやすいように図を付する。それぞれの対応において、「……………」(点線)の左側がノエシスの契機であり、右側がノエマの契機である。



#### 「統握」と意味の「核」

「統握」*Auffassung* とは、志向している対象に対して、それが「何であるか」ということを把握する意識の働きであり、それによって対象に与えられる規定が、「意味の核」としての「ノエマ的意味」である。

既に知覚の<ノエシス—ノエマ>構造において見た、「意味付与」としてのノエシスと、形成された「意味」としてのノエマは、これのことである。『イデー』では、「意味」という概念は、広義のノエマと同じことを指すほどに広義で考えられており、そ

の際には、「何であるか」という最も中核的な要素が「意味の核」と呼ばれることになるのである。

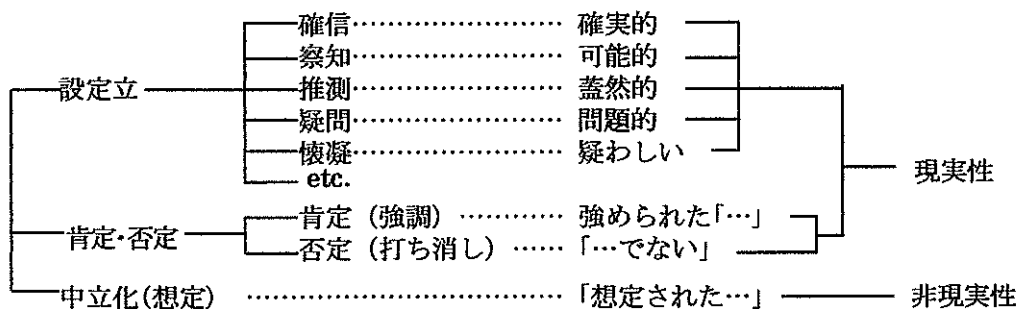
この「統握」に際しては、同一の対象を二通りに意味付けることも、逆に二通りの対象に同一の意味付けを与えることも、可能である。例えば、一枚の絵皿を一個の食器と視たり一個の装飾品と視たりするのは前者の例であり、また、宵の明星と明けの明星とを「太陽系第二惑星」として観るのは後者の例である。

「定立」の性格と存在様相

ノエシスというのは、対象を志向する意識の作用を広く指す語であって、いままで見てきたような「意味」を形成・付与する「統握」だけを指すものではない。これから見る「定立」という作用も、ノエシスの重要な作用である。

「定立」Setzung/Thesis とは、存在するものとして「立てる」「置く」という作用である。統握されたノエマの意味に、「存在」に関する契機を付け加えることである。意識は、様々の様相においてこれを行なう。ノエマの方も、単に「何であるか」だけではなく、それが「存在する」とか「存在するかも知れない」とかいった存在様相が付け加わった形で形成されてくる。ノエマの意味にその存在様相が加わったノエマを「命題」Satz と言うのは、「定立された gesetzt 意味」ということを表現したものであろう。

この「定立」作用を、フッサールは細かに分類している。ここでも図を示しておこう。同様に、右側に対応しているのが、定立の諸様相に従って現れてくる存在様相としてのノエマの契機である。



「設定立」と呼ばれているものの内に分類されているのは、意識の信念作用の基本的な諸形態である。最も強い「確信」——ウアドクサとも呼ばれる——から、信念の強さに従って、図に列挙された様々の段階を有つ。それらに相応して、ノエマ側にも、図に列挙されたように、確実さの様々な段階が現われる。

「肯定・否定」は、信念の内容と相関的に関わる。

「肯定」は、例えば、「間違いなく……である」と強調する。「否定」は、例えば、「……は確実だとは言えない」という形で信念と関わることも在れば、逆に「……でないことは確実だ」という形で信念と関わることも在る。

以上が、現実の存在——その成否や程度はどうであれ——に関わるのに対して、「中立化」とは、現実の存在には無関心に、単に想定する作用である。

対象の存在様相を意識による定立の諸相に従わせるという考え方は、現象学こそが説得的に取り得るものである。この考え方の内に我々は、「存在する」とは、認識論的には「定立される」ということに他ならない、ということ洞察できるのである。

「直観」と充実

第三の成素である「直観」Anschauung というのは、<何であるか>と存在様相とが共に規定された「命題」を、「真」なるものとして充実させるように働く意識の作用である。これによって、ノエマの方には「明証性」が現われてきて、直観による充実の強さに応じて、明証性の程度も規定されることになる。例えば、眼の前の花について「ここに赤いバラが在る」という判断を自分の内で（口に出して表現しないまでも）為したとしよう。この認識が、極めて明晰で判明な感覚的な知覚内容によって「充実」されているならば、それは明証的であり「真」なる認識だと言ってよい。しかし、周りが暗くて知覚内容が十分に明晰・判明でないならば、「充実」の程度が弱くて明証性が充分でなく、確実に「真」なる認識だとは言えない、ということになる。

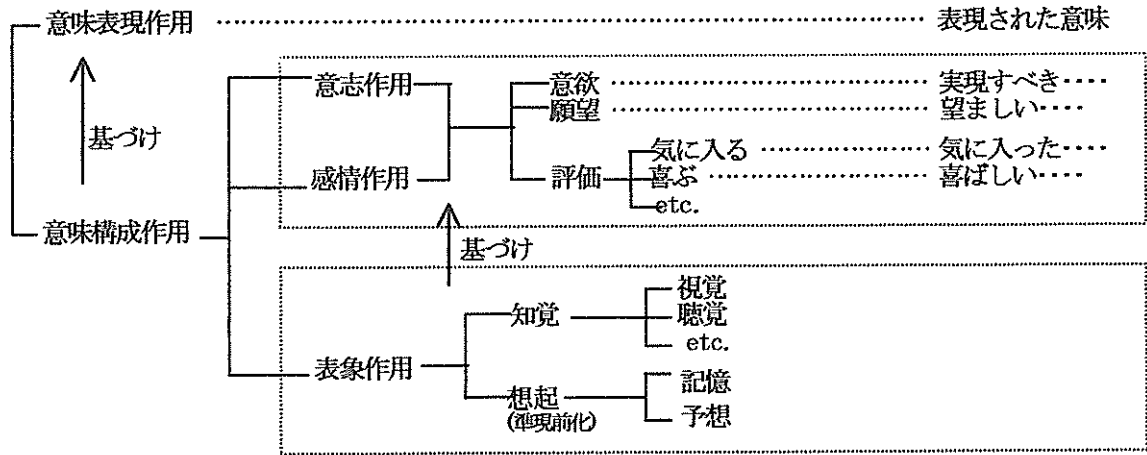
「命題」が「直観」による充実を受けて明証の程度を具えるようになったノエマを、「全きノエマ」という。それは、意識作用が規定し得る限りの形式を規定し尽くした対象である。

なお、この段階の<ノエシスーノエマ>関係は、後に見る「真理と明証」の問題に、実質的に関わっている。

作用性格と「基づけ」

これまで我々は、主に知覚という場面を念頭に置いて、フッサールの考え方を見てきた。 フッサール

ル自身、知覚を最も根源的な意識経験として考えている。しかし、究極的にはこの知覚に基礎を置きつつも、さらに彼は様々な意識段階を意識作用の性格に従って区別している。例によって図を示そう。同様に、点線の左側がノエシス、右側がノエマである。



「知覚」は、諸々の物についての実際の認識である。「記憶」の中で過去を志向したり「予想」によって未来を志向する作用が「準現前化」と名付けられるのは、それらが知覚に準ずるような仕方では対象を言わば目の前に立て置く作用だからである。「表象」Vorstellen とは、自分の<前に立てる>という作用に他ならない。

表象作用が対象のみに関心が限定されているのに対して、「感情」や「意志」という作用には、意識自身の価値判断が加わってくる。例えば、「この……は美しい」とか「この……を食べたい」とかのようである。

表象作用にせよ感情・意志作用にせよ、それらは、

自分の内だけで「意味」——広義での——を「構成」している作用である。今度はこれを他者に伝えたいと思えば、この「意味」を「表現」しようとすることになる。

これら三種の作用の間には、先のが後のものを「基づける」という関係が成立する。表象作用は感情・意志作用を基づけ、意味を構成する作用は意味を表現する作用を基づける。後のものは先のものに「基づけ」られて初めて成立する。しかしまた、その度に新しい性格のノエマ的意味と定立様相が加わる。こうして、<ノエシスーノエマ>関係の重層的な構造が現われるのである。

5. 真理と明証

『イデーン』第一巻第四篇には、真理と明証に関わる理論が展開されている。先に触れたように、「直観」による充実、この問題に関わっている。<ノエシスーノエマ>分析の「真理」論的な側面として、これを見ていこう。

問題

「真実に存在する」「真に現実的である」「真理である」ということは、現象学的に何を意味するのだろうか？

「判断が客観・対象と一致すること」というのが「真理」の古典的な定義である。しかし、「客観」と言い「対象」と言っても、それは意識の志向によって構成されるものなのだから、この「定義」は何の意味も無い。意識が形成した判断を、意識が形成した客観・対象に対照させているだけのことである。最終的には、「真」は、意識の内部で決着されるしかない。

この問題に対して、フッサールは、「真」とは定立の「明証」性 Evidenz である、と答える。そして、「明証」とは、「命題」が「充実」されているということである。

### 「明証」の諸区別

この「明証」についてフッサールは、様々な角度から区別している。レジュメ風にだが、挙げておこう。

○「感性的」直観による明証と「悟性的」直観による明証——前者は、感覚与件を伴う知覚・想起等により「見る」働きによる明証であり、後者は、本質・数学的真理を「洞察」する働きによる明証である。

○「原的」明証と「派生的」明証——前者は、根元的な「なま」の明証（例えば、知覚の際、定理の証明を遂行する際）であり、後者は、想起されたものの明証（例えば、記憶の際、定理を思い出して適用する際）である。

○「実然的」明証と「必当的」明証——前者は、個々の事物に関する明証（例えば、「このバラは赤い」について）であり、後者は、本質に関する明証（例えば、「赤いものは延長を有つ」について）である。

○「十全的」明証と「不十全的」明証——前者は、対象が有する諸規定の全体に関する明証（例えば、「三角形」の諸規定に関して）であり、後者は、対象が有する諸規定中の部分的な明証（例えば、「このバラ」の諸規定に関して）である。本質認識においては、十全的な明証が可能だが、事物認識においては、現実には常に不十全的な明証にとどまり、十全的な明証は、あくまでも理念であり続ける。

### 「明証」の段階構造

注意すべきものとして、明証の段階構造ないし重層構造といったものに触れておこう。

第一に、「直接的」明証（それ自身における明証）に対して、このような直接的に明証的なものに根拠付けられた新しい明証——「間接的」明証——というものも成り立つ。例えば、証明や推論の際の明証や、あいまいな記憶を幾つかの確実な記憶の結合から確実なもののみならず際の明証、がそうである。

第二に、「定立性格」との関係について。既に見たように信念の諸段階が区別されるのに応じて、明証の程度も、一方から他方へ移行し得る。例えば、或る感性的直観が、「このバラは赤い」という認識を十分に充実しないが、しかし「このバラは赤いかも知れない」という認識を十分に充実する、という場合のように、強い定立にとって不十分な明証も、弱い定立にとっては十分な明証となり得る、といったことが在る。

第三に、「作用性格」との関係について。既に見

たように、意識作用には、その性格から区別される幾つかの種類が在り、それらは「基づけ」の重層関係を成していた。このことに相応して、明証にも重層的な「基づけ」関係が成り立つ。理論的な領域の内部では、根元的信念（ウアドクサ）の明証が、信念に関する他のあらゆる明証を「基づけ」ており、さらに、理論的明証は、価値的領域における明証や実践的領域における明証を「基づけ」ている。

## 6. 「還元」

さて、現象学へ入るためには、方法論的に、一定の手続きを経ることが必要となる。それが、「還元」**Reduktion** と呼ばれる手続きである。いままで見てきた現象学の内容は、そのすべてが、この「還元」の結果獲得された、意識の在り方ないし存在次元、また探求の方法態度、に立つことを通して、初めて得られたものなのである。最後にこれを見ることにしよう。

この手続きは『イデー』第一巻にも記述されているが、用語の混乱を避けるために、14年後に書かれた『ブリタニカ』草稿の記述に従うことにしよう。

### 「現象学的還元」

現象学は、「事象そのもの」へ至ろうとする学である。それは、日常生活や諸科学が前提していることらに対して、その根拠そのものを問う、ということでもある。その方法は、存在するものに対して根底的な仕方で近づく、ということの内在于。

幸いにして眼も耳も不自由でなければ、我々は、光や音にあふれた世界の内に生きている。しかし、意識から離れば、光は単なる電磁波の一種であって少しも明るくないし、音は単なる空気の振動であって少しもうるさくない。感覚器官というものを生物が有たなければ、宇宙には、光というものも、音というものも、存在する場所が無い。電磁波が飛び交い、空気は盛んに振動してはいても、そこは闇と静寂の世界である。このような世界を、我々は、現実的な世界だとは決して考えない。「意識」と言えば何か主観的であって現実的でなく、他方、客観的で現実的なものは意識からは独立した世界のことだ、というふうに考えるクセを、我々はもっている。しかし、我々がよく知っていて、これこそが現実的なものだと考える世界とは、実は、既に意識の内の世界であり、それ自体において存在するであろう「世界」が我々の意識に現われたものなので



ある。

日常生活や諸科学がその存在を前提する対象やその総体としての世界は、意識に対して現われることによって初めて、我々のものとなる。我々は、意識を通してしか、対象や世界に近づくことはできないのである。だから、存在するものに対して、根底的な仕方では近づく方法は、対象が意識に現われる、その現われ方を究明する、ということの内に在る。

対象は、意識がそれに向う——対象を「志向」する——ことを通して、意識に現われる。だから、対象の現われ方を知るということは、意識が対象を志向する仕方の構造を知るということでもある、と言えるのである。

この志向するという意識の性質は、それ自体としては既によく知られた意識の本性である。意識は、普段はいつも、「自然的態度」において、素朴に対象に向い、対象やその総体である世界がそれ自体で存在していると考えている。しかし、対象への志向に没入している限りでは、意識の志向性そのものは捉えられない。この状態から意識の方向を変え、対象を志向している意識自身へと意識を向けること、対象から意識自身へと志向を「引き戻す」こと、これが、ここでの「還元」である。

その際には、対象・世界に対して意識が素朴に持っている一般的な存在信念は停止させられる。これが「エポケー」——「判断中止」——と呼ばれるものである。世界がそれ自体で存在するということは、言わばどうでもよいこととして度外視され、「かっこに入れ」られる。そして、それは同時に、意識がまさに世界から超え出るといふことである、とも言えるのである。

これによって、対象ないし世界が与えられる場である「意識」という広大な領野が開けてくる。そこは、世界が現われる場である。この現われ——現象——の方から世界に近づくこと、これこそが現象学の課題である。現象学に固有のこの場を開くための還元であるがゆえに、この還元は「現象学還元」と呼ばれる。これを通して、対象ないし世界の在り方を、意識が形成したもの——ノエマないし「意味」——の構造の方から把握・洞察することができるようになるのである。

### 「形相的還元」

いま見たような仕方では開けてくる〈意識〉という広大な領野を、現象学は、どのような態度で研究すべきであろうか。このことに関わる還元が「形相的還元」である。

現象学の方法は、単に意識に現われる事実を羅列的に記述したりすることでないのはもちろん、いわゆる心理法則のような事実的法則を探求したりすることでもない。意識作用の各種の性質に従って、その一般的な本質形式——「エイダス」すなわち「形相」——を把握すること。具体的に言えば、意識の働き方の一般的な構造——現象学的アプリアリ——を探求すること。これが、現象学の研究態度である。「形相的還元」とは、研究の視方向を、意識の事実性から意識作用の本質的形式へと移行させるということなのである。

既に見た、統握・定立・直観といった志向性の基本成素や、表象・感情・意志・表現といった作用性格の区別とそれらの間の基づけ関係等々に関して、それらの一般的な構造を明らかにすることは、この還元によって獲得される研究態度によって、初めて可能となるのである。

### 「超越論的還元」

既に見た「現象学的還元」を通して、世界が意識への現象であると把握することによって、私の意識は、世界から超出することになる。しかし今度は、意識を個々の実在のように考えれば、それはまた、意識を世界の内へ再び与え返すことになる。意識は、世界を構成する主観でありながら、しかしまた世界の内に存在する客体となる。

そこで、世界からの超出ということ意識そのものにまで広げれば、意識そのものをも超出しなければならないということになる。このことは、意識の存在性格を、個々の実在的な意識から超越した次元へまで高め上げる、ということの意味する。これを行なうのが「超越論的還元」である。

「ノエマが意識に実的には属さず、志向的にのみ意識に対して存在する」とされたことを、思い出していただきたい。意識が、そのつどの個々の実在的な存在性しか有たないものだとすれば、それが形成したノエマは、その意識の内に「実的」に付着して存在するしかない。そうならば、意識がノエマとして形成する世界は、そのつどの個々の意識に制約され、言わば恣意的で悪い意味の主観的なものにならざるを得ない。しかし、ノエマは、対象そのものではないから世界に属さないと同時に、そのつどの個々の意識にも属さないとされる。こうして、ノエマは、対象そのものに依存しないと同時に、そのつどの個々の意識をも超えた、「イデア」的な存在性を有つことができるようになる。そして、まさにこのことこそ、「超越論的還元」の成果なのであ

る。意識は、この還元を通して、そのつどの個々の意識が有つ制約から超出した次元へ高め上げられている。このような「超越論的」な意識こそ、ノエマが存在する座なのである。

とは言っても、この「超越論的」意識は、個々の意識とは別に、何か「神」のように中空に架かって存在している訳ではない。「人間はそれぞれ超越論的自我を自己の内に有っている」と、フッサールは言う。先の「形相的還元」は、意識作用のアプリオリな構造を把握するための手続きであったが、「超越論的還元」は、今度は、意識そのものを「形相」化する手続きであり、「超越論的」意識は、個々の意識でありながら、それが「形相」化されて把えられたものだ、と言ってもよいのである。

## 7. おわりに

以上で、フッサール哲学の中心的な部分は覆ったつもりである。しかし、残された重要な諸問題も多い。最初期の数理哲学は、私の主要な研究領域だが、これには全く触れていない。また、初期から後期へ至る論理学に関する諸研究や、最後期の「生活世界」論についても、全く触れていない。特に、フッサール哲学のアキレス腱とも言える「相互主観性」をめぐる問題には、触れる必要が在ると思いつながら、時間的制約から見送らざるを得なかった。これらの諸問題は、別の機会に譲りたい。

